Excellence Award

佐々木 香輔
Kyosuke Sasaki

Street View

プリント／A2／インクジェットプリント／35点

プロフィール
宮城県仙台市出身
2007年　日本大学芸術学部写真学科 卒業

子どもの頃から慣れ親しんだ町が、黒く濁った津波に飲み込まれていく。テレビに映し出される光景を前に、呆然と立ち尽くす。故郷から離れて暮らすもどかしさと、つながらない電話が私をさらに苛立たせる。その日の夜に、被災地に向けて車を走らせた。荒浜の海岸に数百人の遺体、気仙沼では大規模な火災、原発の緊急事態宣言……ラジオから流れるニュースは、心に着地点を見つけられないまま、車内の闇を浮遊し続けた。

3月13日には石巻に着く。祖母の家はコンクリートの基礎だけが残り、壊れた家の木材があたりに散乱していた。近くの湊小学校は避難者であふれ、祖母はそこに避難し無事だった。一階の廊下の倒れた下駄箱やロッカーを、わずかながらに撤去した。避難所でお腹を壊し弱っていた小学生の男の子に、持ってきたお湯と食料を手渡した。陽が落ちるとあたりは真っ暗となり、被災物に埋もれた消防車からは警告音が静かに鳴り響いていた。私をレスキュー隊と勘違いし励ましてくれる老女、遠くで無事の再会を喜ぶ女性たちの声、大勢の避難者の体温と呼吸で、暗闇の教室は不思議な暖かさで満たされていた。

あまりにも現実離れした光景の数々に、想像力が追いつかない。私は震災直後の被災地で過ごした2週間の自身の行動に、今も大きな意味を見出せないでいる。そしてそれが心にひっかかり、被災地に積極的にレンズを向けることができないでいた。

2017年の春、政府は除染作業が十分に進捗し、生活関連サービスが概ね復旧したとして、福島県の浪江町や富岡町、飯館村の一部の避難指示を解除した。避難指示が解除されると、そこは昼夜を問わず誰もが立ち入ることができる。帰宅困難区域と違い、特別な許可を必要としない。毎年東北の各被災地を訪れていた私は、避難指示の解除を待ち、これらの町村も訪れることにした。沿岸部には津波で被災して壊れた家や車が今もそのままで残り、人気のない商店街は扉の多くがブルーシートで塞がれていた。他の被災地とは明らかに違う時間軸が流れている。6年前の震災直後に、不意に引き戻された。6年という歳月を重ねたそれらの光景は、今度は切実な現実感を持って眼の前に立ち現れた。

私は、避難指示解除区域という復興の場の、復興の象徴ともされる街の灯を写すために、これらの光景を夜に撮影することにした。

「毎晩パトロールしてるけど、家がどんどん壊されていくんです。目の前にあるこの空き地も、先月まで家があったんですよ。」

撮影中の職務質問で、いわき出身の警察官が話してくれた。空き地には灰色の砂利が敷かれ、がらんとした空間が夜空へとつながっていく。その空間の暗闇に、街灯の光が滲んでとけ込んでいた。私はこの暗闇が、これからどのような光で照らされていくのかを、時間をかけて撮り続けることにした。答えが出たわけではない。それでも自身の無力さに甘えずに、復興の意味を、祈りとは何かを、人生をかけて考え続けていきたいのだ。

選者コメント：杉浦 邦恵

この作品は、長時間露光で撮られた今の福島が写し出されています。静かなロマンティックな夜景だと思って見ていたのですが、途中から少し気味が悪くなってきたんです。
すると、帰宅が解禁された地域の夜景だとわかりました。まだ10%程しか人が戻っていないらしく、夜がとても暗いんです。福島はアートの主題には難しいと思っていましたが、この作品は違った意味で興味を持って見ることができます。昔の、ノアール映画、探偵映画を想像しながら、惹かれました。大人な作品で、洗練されていて、主題をさらっと描いていると思いました。